佐 Þ 木淳 君 作 作 詇 Ш

秋蕭 々 曠野に漂泊 春静寂なる石狩はるしづか 々の寮窓に倚 ひて人を哭き あ

夕雲遠く友を呼ぶ

哀れ悲しき旅ならむ北斗の啓光さしそえど

暮る秋風 北溟ゆく に啼く虫か 確り は名の みにして

楡<sup>こ</sup>ず に喘ぐ郭公か

知るや無象の天の外に ない まをき はた又魂の語らひか の波濤は荒くとも

何ぃ 処ː ああ 自ぜん 孤独りみ に祓所を尋めゆ の芸術変ら の 寂寥 ねど を

かむ

味がは 鐘鳴りひびく楡陵がねなな に た語らん入相い ひ知り れる人ならで の PX。 の 上ぇ

白銀吼ゆる朝風か 十勝の峰に断雲が 上から みね くもい 雲怒り も

花咲き散

ŋ

て春

春がいり

0

五.

遷りてここに三星霜<sup>うっ</sup>

奇< し 燃ゆる理想に悶えつつ
ものもだ き調の琴と聴き

逝に

し遊宴

女の宵の夢

ŋ

長き生命の斗争にながいのちたたかひ ただひたぶるに辿りゆく

高唱はなんかな自治の歌った。これの意となかな自治の歌を汲み交はし たぎる情熱を篝火に

今逍遥 行手遙けき豊平 森り の 翠り ・の色深い の原野に萠も ゆる

 $\sigma$ 

哀れ愛し 清流に泛ぶ綺花 我が生命こそ真なれ き絢夢なれど の 影が